



## 企画展示のご案内

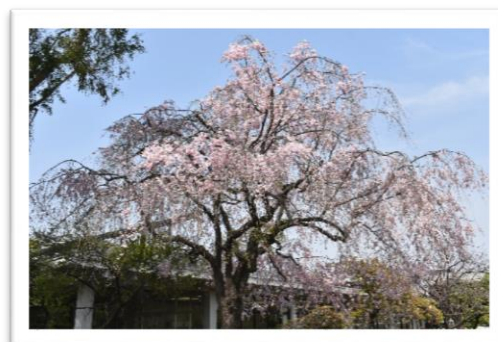
### <パネル展>「憲政記念館と国会前庭の四季」

憲政記念館では企画展示「憲政記念館ふりかえり展」のサブ展示として、2021年（令和3）8月28日（土）からパネル展を開催しております。

四季を通じた憲政記念館の建物や時計塔、国会前庭の美しい花木などの景色を、写真により紹介します。



来年度の代替施設移転後に取り壊される現建物と見比べながらご覧ください。



枝垂桜



晩秋の憲政記念館

### <2階壁面展示>

現在の憲政記念館は、新館建築のため来年度には取り壊され、代替施設に移転します。

2階展示室では引き続き企画展示「憲政記念館ふりかえり展」を開催しております。写真パネルや特別展示の製作物等により憲政記念館の歩みをご覧ください。

もう一つの議会史～国会職員オーラルヒストリー～Ⅱ  
大八木 とし子さん（その5）

前号では、大八木氏の養成所教授時代、現業復帰、速記監督・専門班、速報版、校閲について掲載しました。

<大八木とし子>（おおやぎ・としこ）



昭和43年10月から衆議院事務局記録部で勤務。平成10年4月速記者養成所副所長、平成14年8月記録部第四課調整主幹、平成16年7月記録部第一課長を経て平成20年3月に記録部副部長を最後に退職。

【フルテキストデータベースと補整班】

○大八木氏 平成10年に、衆参両の3当局のトップが合意して始まった国会会議録フルテキストデータベースの運用が始まります。

—— それは何ですか。

○大八木氏 今の会議録検索システム<sup>1</sup>です。

そのシステムにデータを載せるわけですので、平成8年5月に会議録データ管理室が記録部第一課の中にできます。そこでいろいろとデータを扱うわけです。

今は全てパソコンで反訳しますので、校閲が紙の原稿を見て修正したりしますと、そのデータも修正しなきゃならないわけです。それを誰が修正するのかという話が持ち上がっ

て、校閲がじかにやるのかとかいろいろ議論はあったんですけども、種々議論した結果、データ管理室の中に新しく6人の補整班というのを置いて、そこで集中的にデータ補整を行うこととなります。

—— これは、通常の業務の中で、まず、現場に出た方が帰ってきて反訳をする。パソコンで原稿をつくる。校閲の方に見ていただく。それで手が入る。その補整を補整班がする形ですか。

○大八木氏 はい。

—— もともとのデータは臨場された方が打っているの、つくったデータは臨場された方のパソコンに入る。

○大八木氏 そうですね。

それを統合するのもみんなデータ管理室がやっている。

—— 校閲の方は、統合した後に見るという形になりますか。

○大八木氏 いやいや。おのおのの号数で出てきます。

—— 号というのは、会議録の号ではなくて出番の号。

校閲が見てその後の話ですが…

○大八木氏 その原稿をデータ管理室に送って現業のデータを補整してもらうということです。

<sup>1</sup> 国立国会図書館「国会会議録検索システム」<<https://kaigi.ndl.go.jp/#/>>

だから、データ管理室の役割はすごく大事なんです。

—— 大事ですね。そこで間違えると…

○大八木氏 本当にそういうことです。



昭和60年頃 予算委員会出務中

#### 【記録部の役割】

○大八木氏 このころから、議事速報を提供するということが、もう記録部の一大産業みたいになっていくという感じです。

記録部の仕事は、本来は会議録の保存と公開だったんですよ。プラス議事速報とか速報版の提供ということで、それが審議の促進とか充実に役立っていくわけですから、すごく大事な役割が一つ加わったのだと思います。

—— 公開というと、きちんとつくった後に保存しつつ公開するというので、その前の段階で提供する形で審議に資する資料というか、生のものですよね、直前あったやりとりになりますから。

○大八木氏 そうです。だから、忙しくて、本当にすぐ役立っている

んだなという気持ちになります。

—— 確かに、その効果というのは、ある意味、目に見えますね。速報版によるととか、未定稿によると、きのうこんなことを言ったけれども、そういう質問になりますから。

○大八木氏 大分後の話になるけれども、委員の要求で速記録<sup>2</sup>が出るまで暫時休憩となった委員会が本当にあるんですよ。

その後また私は養成所に行くんですけども、前号で議事速報の要求が高まったというお話をしましたけれども、養成所に行っている間に議事速報の提供実績が3倍ぐらいになっていきます。最初にどのくらいだったかは残っていないんですけども。

—— 3倍ですか。

○大八木氏 そうです。そのころから、特別委員会と特特、委員部はスペ特と言うんですか。

—— あれは私も何かのときにスペ特と聞いて、特もスペシャルじゃないかと思ったことがある。特別な特別委員会、スペシャルな特別委員会。

○大八木氏 そうそう、特別な特別委員会、それがいっぱいできるわけなんですよ。

財政構造改革特別委員会、これも特別な特別委員会でしたし、緊急経済対策特別委員会、これも特特です。それから国鉄林野特別委員会、これも特特。それから行革。そういう委員会がメジロ押し。結局、それらの審議過程で議事速報の提供要請が増

<sup>2</sup> 第164回国会衆議院厚生労働委員会の平成18年5月26日長妻委員発言に「～速記録すぐ出るとしますので、速記録が来るまでちょっと休憩していただきたいと思うんです、重要な問題ですから」とあるもの。「議事速報」や「速報版」とは異なる。

えていったんじゃないでしょうか。

私の2度目の養成所勤務の間に、記録部の中ではそういう変化がどんどん起きていたということです。

【速記者養成所副所長】

—— 平成10年4月、副所長として養成所に行かれる。この経緯というか、本人としてはちょっと意外というか、意外というほどではなかったかもしれませんが…

○大八木氏 でも、また行くのとか…

—— まだ管理職ではないですね。

○大八木氏 そうです、管理職ではない。所長は管理職ですけども。

でも、恬として所長ですと座っているわけじゃなくて、もちろん、ちゃんと授業に出ています。

—— そうしますと、副所長、教務も、当たり前ですが、授業をしますね。

○大八木氏 もちろん、6人全員が。

—— 担任の話がございまして、3人いらっしゃる……

○大八木氏 1人が符号主任、あと2人が1年と2年の担任。副所長が研修科の担任。

—— 生徒時代と教授時代と、副所長で行かれたときというのは、時代が変わったなとかここら辺が変わったなというのは何か印象はございませんか。

○大八木氏 それは余りなかったかな。ただ、副所長は、研修科の担任のほかに寮の管理もするんですよ。誰々をここの部屋に入れるという割り振りとか、あと、何か問題があれば副所長が対応するとか。

そういう意味では、変わったというよりも、生徒は寮生にもなるわけですから、そういうことの中で感じることはありました。

というのは、学校から30秒のところで生活して、学校生活も一緒にしているというのと、やはり、中では人間関係の問題が起きたりしますしね。また、時々、腱鞘炎みたいになって医者に通いますとか、そういうのが昔よりあったんじゃないかなという気はします。

—— 副所長というのは、そういう意味では庶務的な役割ですね。寮の話とか病気だとか、人間関係に配慮するとか。

○大八木氏 そうですね。



当時の速記者養成所

○大八木氏 もう一つ、養成所の八十年史<sup>3</sup>、前任者がずっとかかわってつくっておられたのを発行するという形になりました。

—— 平成10年4月に副所長になられて、これは奥付では、平成10年10月が発行日になっています。その間の、平成10年5月に80周年ということでした。行かれて1カ月ちょっとで80周年を迎えられた。

○大八木氏 そうなんです。

—— 養成所の節目節目で養成所

<sup>3</sup> 衆議院速記者養成所八十年史

に行かれたり、しかるべき立場にいらっしゃったんですね。

○大八木氏 振り返ってみると、本当にそうだなと思います。でも、八十年史は前任者がなされたことをたまたま受け継いで発行しただけなんです。

でき上がったものを院内の方たちにお配りして歩いたんですよ。そのときに、よくつくりましたねとか、ああ養成所ねとかと言って受け取ってくださる方が大半だったんですけども、その中で、ああ80年か、もう100年はないねと言われたのがすごくぐさつききて、痛みを感じた覚えがあります。養成所の立場で見れば、永遠にじゃないけれども、まだそのころは、なくなることまでは考えていませんでしたから。

—— 管理職前の、もう副所長時代から大変革期に遭遇してきている…

○大八木氏 押し寄せてきている。そういう大波のかぶる中を泳いできた感じですよ。

#### 【養成所統合問題】

○大八木氏 私が副所長でいたときに一番本院と行ったり来たりしなきゃならなくなったのは、衆参の養成所の統合問題が起きたからなんです。

—— もうそのころですか。

○大八木氏 そうなんです。

平成12年に衆参速記者養成所統合問題等検討委員会というのができまして、私もそのメンバーに入りましたので、しょっちゅう本院に行って

話し合いました。

養成所と似たような学校がいろいろありますよね。例えば自衛隊の方たちも、待遇の面でみんな国が面倒を見るとか。

—— 防衛大学校とか防衛医大だとか。

○大八木氏 そういう似たようなところを見学に行ったりして、これからどういう統合をしてどういう形にしたらいいかとか、いろいろ検討しました。

違う事務局にある養成所を一つにするといっても問題がたくさんあって、合意するまではすごく大変だったんですけども、一応、形がついてまとまりました。でも、いろいろあって、結局実現はしませんでした。

#### 【管理職昇任】

—— 平成14年8月、記録部第四課に調整主幹という形で戻られます。管理職に昇任されたということですね。

○大八木氏 はい。

—— 管理職になったときの御感想はどうですか。

○大八木氏 ただただびっくりしました。

主幹って、事務主幹という行政職<sup>4</sup>の方の主幹がおられて、それともう1人速記者の主幹というのがいたときは調整主幹と言われたんです。翌年、その事務主幹がなくなって、総務主幹という名前で第一課に行くことになりました。

いろいろな機能が第一課に集まっていた。部長室の隣の部屋で、

<sup>4</sup> 国会職員の給与は、職種等により異なる給与表に基づき支給されている。事務職員については行政職給料表が、速記者については速記職給料表が適用される。



記録部第一課総務主幹時代

私が速記者で総務主幹になって行って、行政職の方たちと一緒に仕事をしました。

—— 事務主幹というのは、行政職の方がやられていて、なくなったというのは、そういうポストがなくなったということですか。

○大八木氏 ええ。そのころは事務処理体制の見直しが行われて、運営も調査も速記者だけになるなど、行政職の方の人数を減らしていたので、その一環かなという気はします。

—— もしかしたら、事務主幹をもう廃止することを念頭に、総務主幹に持っていく意味でタイミング的に調整主幹に置かれたという…

○大八木氏 そうかもしれません。

そのころ、有事関連法などの重要法案で地方公聴会が11カ所ぐらいで行われたりして、運営は出張者の捻出に苦労したそうです。速記者というのは外に行く仕事を度々やっているわけじゃないので、一連の手続や行程について、初めて地方公聴会に行く人のためにマニュアルをつくった記憶があります。

—— 地方に出張して業務をするマニュアルですか。

○大八木氏 そうです。昔から地方公聴会はやっていますけれども、や

はりこんなに多くなってくると…

—— マニュアル化しなきゃいけない。

○大八木氏 そういうもろもろの仕事、それは課長がやるというよりは総務主幹じゃないですかね。

#### 【現業の1人出務】

○大八木氏 私が養成所から戻る1年前に、部内に会議録作成に関する基本問題検討委員会（略称 基本検）が設置されました。

会議録全般についてこれからどうやっていったらいいか、記録部の将来像はどうあるべきか、そういうことを検討するために始まったんですけども、そのときの副部長の薄葉威士さんが、1人出務の試行を目指して検討してほしいと。今までは2人1組で現場に出ているけれども、これからは1人で出番に出ることを視野に考えてほしいということが問われて、私が基本検のメンバーに入った時はその検討を進めていました。

そして基本検は平成15年8月に答申を出して、9月の第157臨時国会から第四課だけ試行的に1人出務となります。

でも、さすがに1人というのはすぐに誰でもができるわけじゃないので、四課の主任速記士になっている人限定で始めます。

—— ほかは。

○大八木氏 試行ですから四課だけで。でも、その試行を踏まえて徐々に全課に広げていくという形になります。

1人出務になると、今まで副だった若い人が急にひとり立ちするわけですから、ブロック長が「ブロック

長通信」というのを発行していろいろなアドバイスを盛り込んだり、課内の協力態勢をしいたりして、1人出務をサポートしていく形をつくりました。

—— 副部長が1人出務を検討してくれと言った趣旨、背景というのは何ですか。

○大八木氏 今まで見てきたように、議事速報を出したり速報版を出したりして一次校閲が必要になったりとか、そういうことに人数がとられていくわけでしょう。校閲部門を手厚くしないとなかなかできないわけです。

それともう一つ、データ管理室の充実や行政職の削減もあって、これからはそうやってでも組数を確保していく必要があったんです。

—— 校閲を厚くする、現業もそれなりに組数を確保しなきゃいけない。そうすると、2人1組では回らなくなるから、1人で出務できるように検討しろというのが趣旨ということですか。

○大八木氏 そうです。

将来的には、やはりいつまで速記符号がもつかという危機感もあったんだと思います。基本検の検討課題の一つは速記法以外の手段による会議録作成の考察と具体化でしたから、それも大きいでしょうね。

ということで、私が第一課長になってからは、校閲体制をもっと強化しなくちゃということで、それま

では予算とか特別な委員会以外は1人校閲だったけれども、もうこれからは1委員会2校閲制にするとか、専門班を更に各課に2人ずつ置いて、その人たちが議事速報の提供に協力するという事など、部内の体制の見直し、強化を図っていくことになります。

【第一課長】

—— 第一課長に平成16年7月になられて、これはかなりいろいろな経験をされた。

○大八木氏 筆頭課長ということになりますから、衆議院全体のプロジェクトチームとか、他部課の方々が集まる会議に出ることになるので、そういう意味では、第一課長になったときが一番緊張しました。

—— 緊張しましたか。

○大八木氏 そういう場に出ていくということが余りなかったでしょ、特に記録部にいると。今では、行政職の皆さんと一緒に初任研修を受けるので同期意識があるようですし、人事の交流もあります。私の時代は他部課の方との交流は個人的なものがほとんどでしたからね。今までお付き合いのなかった管理職の方々の会議に臨む、そういう意味では、筆頭課長としての責任を感じ、緊張もしました。

(以下、その6に続く)

※ 衆議院の速記については、YouTube 衆議院事務局チャンネルにある「【衆議院記録部】国会の速記」

(<https://www.youtube.com/watch?v=Q2xD9SycAI>) でご覧になれます。

## 憲政記念館の土地の由来

憲政記念館は、国会前庭（北庭、千代田区永田町一丁目1番地）内に建っています。

当館が建つ高台には、江戸時代初頭に肥後熊本藩主加藤清正の屋敷が置かれていましたが、1632年（寛永9）、次代忠広の時に改易されて、屋敷が没収され、その後、近江彦根藩井伊家の上屋敷が置かれました。幕末の大事件の一つである桜田門外の変（1860年（安政7））では、大老井伊直弼が、この屋敷から登城する際に水戸浪士などの襲撃を受け、暗殺されました。

明治維新後、新政府用地となり、1870年（明治3）8月、反政府勢力の監察などを行う政治警察である弾正台が設置されました。翌年これが廃止されたのち、陸軍用地となり、1878年（明治11）に木造2階建の陸軍省庁舎が竣工し、1881年（明治14）には、現在の時計塔周辺に、陸軍の軍令（軍の指揮や作戦指導）を管轄する参謀本部庁舎が竣工しました。

参謀本部内に陸地測量部（国土地理院の前身）があったことから、同庁舎隣接地に、1891年（明治24）、日本水準原点が設置されました。

参謀本部庁舎は、明治東京地震（1894年（明治27）6月）で被災し、その北側に新館が建設される一方、1898年（明治31）以降、旧庁舎は陸地測量部が全面使用しました。

陸軍省及び参謀本部は、1941年（昭和16）の太平洋戦争開戦と同時期に市ヶ谷に移転します（陸地測量部は1944年（昭和19）に疎開・移転）が、戦後、陸軍が解体されるまで、陸軍用地として使われました。

1952年（昭和27）、衆議院に土地が移管されたのち、1960年（昭和35）、憲政記念館の前身となる尾崎記念会館が建設されました。



参謀本部庁舎（旧庁舎）



陸軍省庁舎

写真：建築学会「明治・大正建築写真聚覧」（1936年）  
国立国会図書館デジタルコレクションより

【発行人】 山本 浩 慎  
【編集責任者】 高橋 和 彦

【印刷・発行】 衆議院事務局 憲政記念館  
〒100-0014 東京都千代田区永田町1-1-1  
TEL：03-3581-1651 FAX：03-3581-7962



本紙について、私的利用・引用等著作権法で認められた行為を除き、無断で改変・転載・複製を行うことはできません。引用される場合には出所を明示し、また、転載等を行う場合にはあらかじめ当館へご連絡ください。